令和５年度
劇場・音楽堂等活性化・ネットワーク強化事業
（地域の中核劇場・音楽堂等活性化）
成果報告書

団体名		有限会社アゴラ企画
施設名		こまばアゴラ劇場
助成対象活動名		公演事業・人材養成事業・普及啓発事業
内定額(総額)		33,610 （千円）
	公演事業	26,977 （千円）
	人材養成事業	2,318 （千円）
	普及啓発事業	4,315 （千円）

１．事業概要

（１）令和５年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程 主な実施会場	概　要 （演目、主な出演者、スタッフ等）	入場者・参加者数（人）	
1	こまばアゴラ劇場地域貢献公演	R5.11.30～R5.12.3 こまばアゴラ劇場	『サンタクロース会議』作・演出：平田オリザ、舞台美術：杉山至、出演：たむらみずほ、天明留理子、他	目標値 実績値	294 421
2	こまばアゴラ劇場国際交流公演	R5.9.15～R5.10.15 江原河畔劇場、他	『KOTATSU』作・演出：パスカル・ランベール、共同演出・日本語監修：平田オリザ、出演：山内健司、他	目標値 実績値	1,520 1,077
3	青年団　公演	R5.4.7～R5.4.27 こまばアゴラ劇場	『ソウル市民』作・演出：平田オリザ、舞台美術：杉山至、出演：永井秀樹、天明留理子、木崎友紀子、他	目標値 実績値	1,104 1,306
4	うさぎストライプ　公演	R5.5.3～R5.5.14 こまばアゴラ劇場	『あたらしい朝』作・演出：大池容子、出演：清水緑、北川莉那、木村巴秋、小瀧万梨子、金澤昭、他	目標値 実績値	700 654
5	滋企画　公演	R6.1.31～R6.2.7 こまばアゴラ劇場	『オセロー』作：ウィリアム･シェイクスピア、演出：西悟志、出演：伊東沙保、佐藤滋、他	目標値 実績値	480 731
6	青☆組　公演	R5.12.14～R5.12.24 アトリエ春風舎	『十二月八日』原作：太宰治、作・演出：吉田小夏、出演：藤川修二、福寿奈央、大西玲子、土屋杏文、他	目標値 実績値	468 609
7	こまばアゴラ劇場公募公演（1）	R5.5.19～R6.3.3 こまばアゴラ劇場	じおらま『たいない』、ひなた旅行舎『ひなた、日本度をうたう vol.1』	目標値 実績値	816 691
8	こまばアゴラ劇場公募公演（2）	R5.5.31～R6.1.21 こまばアゴラ劇場	日本のラジオ『ココノイエノシュジンハビョウキデス』、シニフィエ『ひとえに』	目標値 実績値	1,152 1,030
9	こまばアゴラ劇場公募公演（3）	R5.6.28～R5.11.27 こまばアゴラ劇場	オフィスマウンテン『ホールドミーおよしお』、スペースノットブランク『松井周と私たち』	目標値 実績値	816 798
10	こまばアゴラ劇場公募公演（4）	R5.9.6～R5.10.23 こまばアゴラ劇場	KPR／開幕ペナントレース『HAMLET｜TOILET』、バストリオ『「一匹のモンタージュ」リクリエーション』	目標値 実績値	1,200 1,132
11	こまばアゴラ劇場公募公演（5）	R5.7.21～R5.7.29 こまばアゴラ劇場	コココーララボ『コココーラ』作・演出：荒悠平、照明：岩城保、出演：松田弘子、山内健司	目標値 実績値	864 497

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

（２）令和５年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程 主な実施会場	概　要 （演目、主な出演者、スタッフ等）	入場者・参加者数（人）	
1	高校演劇ワークショップ	R5.8.12～R5.8.13 こまばアゴラ劇場	参加者：山手城南地区の高校演劇部員、講師：島田曜蔵、井坂浩、泉田雄太、金澤昭　他	目標値	参加者 60
				実績値	参加者 60
2	無隣館オンライン	R5.10～R5.12 アトリエ春風舎、他	参加者：演出家・劇作家・プロデューサー及びその志望者、講師：平田オリザ、太田裕子、大池容子、他	目標値	参加者 25
				実績値	参加者 21

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

（３）令和５年度実施事業一覧【普及啓発事業】

<table>
<tr><th rowspan="2">番号</th><th rowspan="2">事業名</th><th>主な実施日程</th><th rowspan="2">概　要
（演目、主な出演者、スタッフ等）</th><th colspan="2" rowspan="2">入場者・参加者数（人）</th></tr>
<tr><th>主な実施会場</th></tr>
<tr><td rowspan="2">1</td><td rowspan="2">首都圏を中心とした子どものための演劇鑑賞および演劇的手法を活用したワークショップ</td><td>R5.4.15～R6.3.8</td><td rowspan="2">出演者／スタッフ／ワークショップファシリテーター：有吉宣人、植浦菜保子、折原アキラ、北村耕治、河野悟、窪田壮史、宮﨑悠理、村田牧子、森内美由紀、山本雅幸、わたなべなおこ、他</td><td>目標値</td><td>参加者
1,000</td></tr>
<tr><td>駒場幼稚園、他</td><td>実績値</td><td>参加者
911</td></tr>
<tr><td rowspan="2">2</td><td rowspan="2">福島県被災地域を中心とした子どものための演劇鑑賞および演劇的手法を活用したワークショップ</td><td>R5.5.16～R6.2.16</td><td rowspan="2">出演者／スタッフ／ワークショップファシリテーター：有吉宣人、植浦菜保子、折原アキラ、北村耕治、河野悟、窪田壮史、宮﨑悠理、村田牧子、森内美由紀、山本雅幸、わたなべなおこ、他</td><td>目標値</td><td>参加者
1,000</td></tr>
<tr><td>福島県立いわき総合高等学校、他</td><td>実績値</td><td>参加者
1,057</td></tr>
</table>

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

２．自己評価

（１）妥当性

自己評価
ミッション（社会的役割等）・ビジョンや地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。
当劇場のミッションは「地域に生き、世界に伸びる。目黒区駒場に根ざした『劇場文化』の定着と醸成。」である。当劇場の位置する目黒区駒場は都心の住宅街となっているが、東京大学があり、渋谷からも徒歩圏内となっていることから、劇場周辺は多様な年齢層の人々が行き交っている。また、演劇の街である下北沢へのアクセスもほど近い。反面、劇場の位置する駒場東大前商店街は住民の高年齢化に伴い、空きテナントが増加し、少しづつにぎわいを失いつつある。このミッションと地域特性から、ミッションの達成に向け以下の事業を計画・実施した。 ・「公演事業」では 11 つの事業を実施した。「『劇場文化』の定着と醸成」を目指し実施している「劇場支援会員制度」の更なる促進や下北沢との差別化も意識しながら、年齢や趣味を問わず多くの観客が来場できるよう、エンタメ性や文学性など複数の視点から、実績が高く評価される中堅カンパニーや、これからの活躍が期待される新進気鋭の若手カンパニーなど、現在の舞台芸術界を牽引する計 13 団体を全国から募集し、劇場ラインナップとして 1 年を通して公演を実施した。また、子育て世帯の来場が少ないことを受け、『サンタクロース会議』やひなた旅行舎といった、劇場へ足を運ぶハードルを下げるための工夫を取り入れた公演も実施した。 ・「人材養成事業」では、地域の高校生を対象とした「高校演劇ワークショップ」による未来を担う若手人材の育成を行った。また、「無隣館オンライン」を実施し、全国の若手から中堅の演劇人を対象に、理論と実践の両面からハイレベルな創作に耐えうる人材育成を行なった。 ・「普及啓発事業」では、当劇場が長年に渡って地域の児童や中高生向け演劇教育の受け皿となっている状況を踏まえ首都圏を中心とした子どものためのワークショップ実施した。また、首都圏一極化の不均衡を是正すべく、首都圏に位置する当劇場の責務として、専門人材を福島県へと派遣し、子ども向けのワークショップを実施した。
助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。
●文化的意義：公演事業では、青年団『ソウル市民』、こまばアゴラ劇場国際交流公演『KOTATSU』が 1000 人を超える動員を達成するなど現在の観客層のニーズを掴んだ質の高い公演を提供できた。その他の上演も多数の新聞や Web メディアに劇評が掲載されるなど、時勢を捉えた作品を多く創造できた。人材養成事業・普及啓発事業では、地域の文化発展に寄与する若手人材を育成するとともに、ワークショップを通じて市民と劇場の垣根を無くし、劇場文化の普及と発信に寄与している。特に「無隣館オンライン」参加者の安藤奎が執筆した『地上の骨』は第 68 回岸田國士戯曲賞発表最終候補にノミネートされた。 ●社会的意義：公演事業では、地域のにぎわいの創出に寄与した。また、「劇場支援会員制度」として劇場の観客を持つことで、観客とカンパニーの新たな出会いを創出できた。加えて、大人と子どもが話し合う青年団『サンタクロース会議』や俳優と音楽家によるライブのひなた旅行舎『ひなた、日本度をうたう vol.1』の上演は、家族世帯や若年層の来場促進につながり、地域の民間劇場としての社会的な役割を果たした。人材養成事業では、「高校演劇ワークショップ」「無隣館オンライン」でアウトリーチ、専門人材育成を劇場が実施することで、民間劇場でありながら公共性の高さを保ことができている。普及啓発事業では演劇を活用したコミュニケーション教育を実施することで、通常の学校教育や一般のセミナー等とは一線を画したプログラムを提供出来ている。 ●経済的意義：公演事業では、公演ごとに適切なチケット料金や、割引を設定することで多くの観客が劇場に足を運ぶ機会となった。また、劇場主催で若手カンパニーの公演を実施することで、創作・公演機会の向上にもつながっている。

（２）有効性

自己評価
目標を達成したか。
●公演事業指標達成状況 ①劇場レパートリー作品の実施推進による年間ラインナップ公演の魅力向上（事業番号 3） ②年間ラインナップ公演の多様化と、支援の拡充（事業番号 3～10） ・支援会員数（令和 5 年度目標 350 人→令和 5 年度実績 277 人） ・総来場者数（令和 5 年度目標 10,000 人→令和 5 年度実績 8,946 人） ・主要な演劇賞〈岸田國士戯曲賞、読売演劇大賞など〉へのノミネート／受賞（令和 5 年度目標 2 件→令和 5 年度実績 0 件） ・新聞雑誌等主要メディアへの劇評記事等掲載件数（令和 5 年度目標 5 件→令和 5 年度実績 9 件） ③国際交流事業の復興（事業番号 2） ・『KOTATSU』公演における有料動員を 1,500 人達成を目指す。→令和 5 年度実績 1,077 人 ④地域の子育て世帯の来場推進（事業番号 1） ・『サンタクロース会議』公演における有料動員 200 人達成を目指す→令和 5 年度実績 421 人 ・託児サービスの実施→未実施 ●人材養成事業指標達成状況 ①　高校演劇ワークショップ参加者の創作活動における能力発揮（事業番号１） ・高校演劇ワークショップ参加者による創作作品数（令和 5 年度目標 12 件→令和 5 年度実績 12 件） ②　無隣館オンライン参加者の創作活動における能力発揮（事業番号２） ・無隣館オンライン参加者による創作作品数（令和 5 年度目標 5 件→令和 5 年度実績 5 件） ●普及啓発養成事業指標達成状況 ①「首都圏を中心とした子どものための演劇鑑賞および演劇的手法を活用したワークショップ」の普及と拡充を通して、目黒区駒場地域を中心に首都圏の子どもたちに向け、舞台芸術の手法を活用したコミュニケーションプログラムを展開する。 ・「首都圏を中心とした子どものための演劇鑑賞および演劇的手法を活用したワークショップ」参加者の拡充（令和 5 年度目標 1,000 人→令和 5 年度実績 911 人） ②「福島県被災地域を中心とした子どものための演劇鑑賞および演劇的手法を活用したワークショップ」の普及と拡充を通して、こまばアゴラ劇場で開発されたプログラムを発信し、被災地域の創造的・精神的復興を促進・支援する。 ・「福島県被災地域を中心とした子どものための演劇鑑賞および演劇的手法を活用したワークショップ」参加者の拡充（令和 5 年度目標 1,000 人→令和 5 年度実績 1,057 人）

（３）効率性

自己評価
アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
事業期間は年度単位として計画しており、適切である。令和 5 年度は、新型コロナウイルス感染症の影響が少しずつ減り、基本的に事業計画通りに実施できた。一方で、マスク着用など感染症対策の方針が刻一刻と変化する中でさまざまな対応を迅速に行う必要があったが、適宜カンパニーと連携をとりながらスムーズに進行できたことからも、一つ一つの事業単位で計画した公演期間やステージ数の計画が適切なものであったと判断できる。人材育成・普及啓発事業においても、これまでの運用の蓄積を元に以前までと同様に実施する計画を立て実施することができた。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。
公演事業において事業番号 11：こまばアゴラ劇場公募公演（5）の食む派『ファミリー・レストランの肖像』は、主催者の体調不良によりやむを得ず公演中止となり、事業費が 50%ほど減少した。そのほかの事業においては、ステージ数や出演者数の増減により変更が生じるものがあったものの、概ね当初計画通りの事業費で実施することができた。

（４）創造性

自己評価
地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。
公演事業では、芸術監督自らの作品の上演に加え、公募により劇場のプログラムオフィサーが選定を行う形式でミッション達成に向けたラインナップを取り揃えた。特に創造性が発揮された事業は以下の通り。 ●こまばアゴラ劇場地域貢献公演　青年団『サンタクロース会議』 こまばアゴラ劇場芸術総監督の平田オリザによる子ども参加型演劇の上演企画。地域のにぎわいの創出を目指し、当事業を通じた子育て世帯の来場推進を図った。地域の教育機関への案内や優待を積極的に行なった結果、目黒区駒場の子どもたちの多く来場につながり、客席数を大幅に増加させての公演実施となった。当劇場での2017 年以来の再演ということで、大人の来場も多くみられた。大人と子どもが年齢の差がなく楽しめる作品を上演することができ、劇場として子ども向けの事業を行うことの意義を感じさせた。 ●こまばアゴラ劇場国際交流公演『KOTATSU』 アフターコロナでの、当劇場として久しぶりの国際交流公演となった。2022 年の初演の際は、ごく限られた観客にしか観劇の機会を提供することができなかったが、兵庫・東京を巡りながら再演を行えたことで、レパートリー化の達成と、各地域における新規観客層の獲得に繋げることができた。フランスを代表する劇作家・演出家パスカル・ランベールとのコラボレーションは長年行ってきた国際交流の集大成であり、日本の舞台芸術における国際交流の拠点である当劇場の役割を改めて示すものとなった。 ●青年団『ソウル市民』 初演から 30 年以上に渡り日本各地で上演が行われている平田オリザの代表作の上演企画。東京では 5 年ぶりとなる再演をキャスト・演出を一新し、これまでに観劇経験のある人々にも新鮮に楽しめる作品として上演した。青年団に所属する若い世代の俳優を積極的に起用し、継続的な活動・育成によって、創作環境の地盤が確かに形成されていることを体現できた。作品は本の植民地支配下に生きるソウルの日本人一家を通して、 植民地支配者の本質を描いているが、昨今の不安定な世界情勢と呼応して大変な好評を博し、追加公演の実施もあり 1,306 名の動員を記録し、目標を超える結果につながった。 ●うさぎストライプ『あたらしい朝』 アトリエ春風舎芸術監督の大池洋子の作・演出によって、2020 年にアトリエ春風舎で実験的に上演された『あたらしい朝』をフルサイズにアップデートした上演企画。上演は非常に好評を呼び、また、テアトロ 2023 年 7 月号に林あまりによる劇評が掲載されたほか、2024 年 1 月に国際ダンスフェスティバル『踊る。秋田』芸術監督の山川三太により招聘され、あきた芸術劇場ミルハスでの公演を行った。カンパニーの新たな代表作となった本作は、長年当劇場で公演を行ってきた研鑽の結果が遺憾無く発揮されたものである。 ●滋企画『オセロー』 青年団俳優・佐藤滋が主体となって作品を創造する上演企画。昨年上演され好評を博した『K2』に続き、元 SPAC の演出家・ニシサトシを招き『オセロー』を上演した。観劇に訪れた翻訳者の松岡和子が「台詞をこう言って欲しかった、という今まで一番のデズデモーナ」と述べるなど、その本質を損なうことなく現代に鮮やかに浮かび上がらせた本作は、客席を増席してなおほぼ満席で、731 名と目標を大幅に上回る動員となった。当カンパニーは昨年の旗揚げ公演、そして本年の成功を弾みをつけ、既に更にキャパシティの多い劇場での公演を予定している。こうしたカンパニーのステップアップは、ラインナップ制度を通じた若手カンパニーの創作支援の成果を示すものである。

自己評価
地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。
●ひなた旅行舎『ひなた、日本度をうたう vol.1』 俳優の日髙啓介と多田香織と音楽家の坂元陽太のコラボレーションによる上演企画。狂言『木六駄』（現代口語訳・岡田利規）、『ありがとう』（作詞・細野晴臣）など、さまざまなテキストを、音楽ライブの形式で上演した。音楽の力も借りながら、俳優としての技術を遺憾無く発揮し、日本語の豊かさを示した本作は、大人も子どもも誰でも楽しめる良質な上演作品に仕上がった。 ●スペースノットブランク『松井周と私たち』 ピチェクランチェンとジェローム・ベルによる『ピチェクランチェンと私』の構造を借りることで、”演劇”というものが何かを様々な側面から描いた上演企画。先鋭的な作品で知られる当カンパニーだが、レクチャーパフォーマンスの形式を取ることで観客層の間口を広げており、支援会員の多くの来場に繋がった。また当カンパニーは、2018 年以降継続して当劇場での上演を行っているが、Dance Base Yokohama レジデンスアーティスト（2023 年度 – 2024 年度）に選出、メンバーの中澤陽が公益財団法人セゾン文化財団 セゾン・フェローⅠ（2021 年度 – 2024 年度）に選出されるなど、当劇場での活動を通じて順調なキャリアアップを図っている。 ●バストリオ『「一匹のモンタージュ」リクリエーション』 団体として 2018 年以来の劇場での公演となる上演企画。当カンパニーは、近年、オルタナティブスペースや野外での上演を主な活動の場としてきたが、それらを劇場というサイズにアップデートし、さらには劇場の可能性を広げるような空間の使い方を提示した。本作から引き続き劇場での上演となった、第 14 回せんがわ劇場演劇コンクール参加作品『セザンヌによろしく！』は、グランプリ、オーディエンス賞、俳優賞を受賞と各賞を総なめの結果となり、当劇場での創作がカンパニーとしての飛躍に寄与する結果となった。

（５）持続性

自己評価
事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。
これまで人材育成事業として実施してきた「こまばアゴラ演劇学校・無隣館」では、一期 2 年のスパンで、これまで三期にわたって開催し、多くの才能を輩出してきた。今年度の人材育成事業 2「無隣館オンライン」は、専門人材育成の対象範囲を日本全国へと広げるべく、オフラインとオンラインのハイブリットでの実施が計画された。事業は計画通り実施され、全国から注目の若手から、更なるキャリアアップを狙う中堅まで、多種多様な演劇人が参加した。特に参加者の安藤奎が執筆した『地上の骨』は第 68 回岸田國士戯曲賞発表最終候補にノミネートされたのは特筆すべき成果であろう。 こうしたことを始め、こまばアゴラ劇場が計画・実施した公演事業や人材養成事業によって、年間を通じて絶えず新しい才能の発掘と育成に努めた。こうした若手の作家・実演家達は、自身で集団を立ち上げたりなどして創作を行い、プログラムオフィサー選定の下、公演事業としてこまばアゴラ劇場で上演を行ってきた。 また創作活動だけではなく、ワークショップ等の普及啓発・アウトリーチ活動についても、内部でファシリテーターの養成・育成を行い、こまばアゴラ劇場が持つネットワークを通じて全国で事業を展開しており、こうした活動が作品の招聘へと繋がるケースも多く見られた。 そうした意味においても、こまばアゴラ劇場が実施する公演・人材養成・普及啓発といったそれぞれの事業によって、単発の独立した企画ではなく、それぞれの事業が互いに影響を及ぼし合うことで、劇場の「機能強化」が推進された。 だが、こうした成果を持ってしても、新型コロナウィルスが劇場運営に与えた影響は払拭しきれず、当劇場は 2024 年 5 月を持って閉館するに至った。しかしながら、当劇場で育まれた専門人材及び培われたネットワークはアトリエ春風舎へと引き継がれており、以降も引き続き、事業の精査を行いがら、地域から世界へと広がる『劇場文化』の定着と醸成に努めていく。